

平成 23(2011)年度自主企画展

日本の新進作家展 vol.10

写真の飛躍 そこに原点がある。

elan photographic -- Contemporary Japanese Photography

会期:2011年12月10日(土)~2012年1月29日(日)

会場:東京都写真美術館 2階展示室

主催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/東京新聞

協賛:株式会社資生堂/東京都写真美術館支援会員

協力:有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー

■展覧会内容

東京都写真美術館は写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の展開の場となるよう、様々な事業を展開しております。

第10回を迎える今年の新進作家展は、写真の原点となる手法を生かしながら、現代のさまざまな事象と向き合う作家5名を最新作と共にご紹介します。

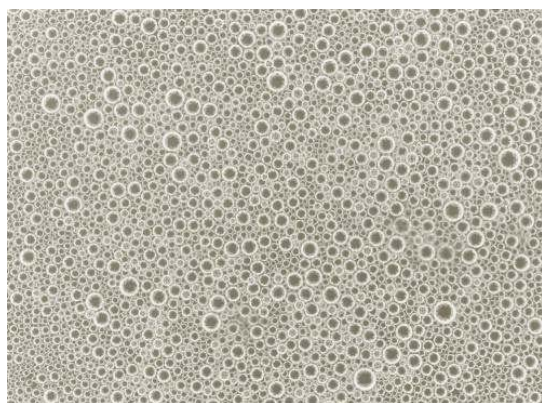
いずれの作家もフォトグラム、ピンホールカメラ、コラージュ、多重露光、露出といった、写真の根源的な手法や特性に着目しながら多彩な作品を制作しています。デジタル画像処理などで想像できる図像はほとんど再現可能になった現在だからこそ、写真メディアの原点に立ち戻ること、感覚や感性の扉を開きつづけてきた視覚そのものを再考するきっかけをつくっているのです。

私たちが想像するより複雑で数多の想定外のことが起きる現実と向き合うためにも、これらの作品との出会いが、写真を見るという行為や視覚によって生成される記憶、認識といったものを検証する契機となれば幸いです。

これらの表現を受け身になることなく自発的に見て、その中に思考の種をみつけた時、写真ははじめて新たな飛躍の時を迎えられるのではないのでしょうか。

■出品作家

添野和幸、西野壮平、北野謙、佐野陽一、春木麻衣子



添野和幸 / SOENO Kazuyuki

引き伸ばし機に氷、気泡、滴などを直接仕掛けて制作したフォトグラム。はかないオブジェの記録は、物の存在や継続する時間について写真がどのように対するのかを問いかけている。

<プロフィール>

1968年神奈川県生まれ。1991年東京造形大学造形学部卒業後、92年同研究生修了。2002年「コニカフォトプレミオ 24人の新しい写真家登場」に選出。2005年資生堂第12回ADSP授与。2008年フォト・ギャラリー・インターナショナル等の個展では昆虫の羽を引き伸ばし機に仕掛けて制作する作品を発表。「第5回造形現代芸術家展 Transmutation」(東京造形大学附属美術館)等グループ展多数。

水は様々に変化する。雨に川に海に、雪に氷に、そして酒や鏡にもなる。光を捉える可能性を秘めている。

晩酌で眺めるビール。ウイスキーに浮かぶ氷は美しい。光に撃つと更に美しい。

硝子器にその液体を注ぎ、引伸機の中へ、そっと入れてみる。平面と捉えられるフィルム。そのミリ単位の厚みは液体へ置き換えられ、焦点により様々な表情を見せる。

時間の経過と共に、泡が弾け、氷が溶け、硝子に滴が付く。

引伸機の中に「時間、生、死」を内在する世界が現れる。



《AW 01》 2004, 《WI 07》 2004 ©Kazuyuki Soeno

西野壮平 / NISHINO Sohei

モノクロフィルムで撮り溜めた膨大な数の写真をすべて手作業でコラージュして、現代都市の肖像を作り上げた作品。

<プロフィール>

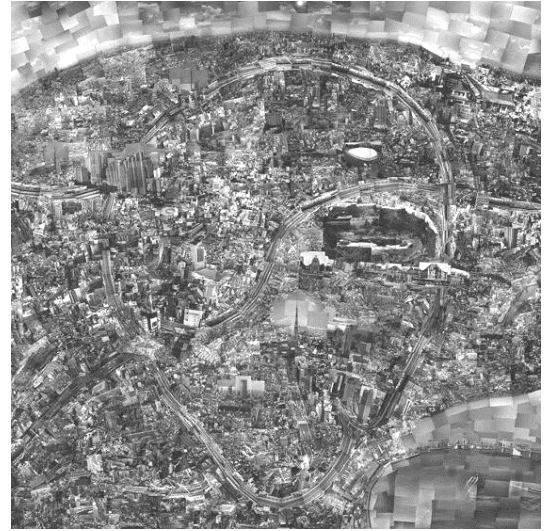
1982年兵庫県生まれ。大阪芸術大学在学中から都市と記憶をテーマに、<Diorama Map>シリーズの制作を始める。2005年キヤノン写真新世紀優秀賞(南條史生/現森美術館館長)受賞。EMON PHOTO GALLERY, Michael Hoppen Gallery(ロンドン)での個展やグループ展他、10年テグ写真ビエンナーレ(韓国)、12年Helsinki Photography Festival(フィンランド)にて展示予定。

数千枚の写真のピースを、巨大なキャンパスの上にその一枚一枚を地図に即して張り合わせ、街を再構築していく。

そこに現れるのは、決して正確な地図ではなく、あくまで旅の視点で見た私自身の“記憶”そのものである。

学生の頃に歩いた四国のお遍路道が写真を始めるきっかけとなり現在に至るまで継続しているということ、改めて感じます。

歩のない将棋は負け将棋と言いますが、歩くという行為の中で気づかされる様々な発見を、私は生涯かけて取り組んでいきたいと思っています。



シリーズ<Diorama Map>より 《Tokyo》, 2004年3月~7月 ©Sohei Nichino



<our face>より《アニメのコスプレの少女たち34人を重ねた肖像/台北のストリートで》 2009年(2010年プリント)

北野謙 / KITANO Ken

特定の場所で特定の人々を撮影したネガを多重露光で何重にも焼き込んだ人物像。全体にぼんやりとした像から人の存在について迫る。

<プロフィール>

1968年東京都生まれ。91年日本大学生産工学部卒業。93年個展「溶浴する都市」(I.C.A.C.ウエスタンギャラリー)、96年「ヤングポートフォリオ展」(清里フォトアートミュージアム)、2006年グループ展「写真の現在」展(東京国立近代美術館)。09年個展「one day」(MEM)、10年個展「our face」(北京市三影堂撮影芸術中心、ケルン Gallerie Priska Psquer)、04年写真の会賞、11年第27回東川写真賞新人賞、第14回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞。

<存在について考えること>が僕の仕事だと思っています。世界各地を訪ね撮影した、たくさんの肖像を1枚の印画紙に一人ずつ重ねて焼き付ける肖像写真を制作しています。<見知らぬ他者をイメージすること>は写真に備わった本質的な機能でかです。肖像は等身大が望ましい。今では日本で制作が難しいラージサイズの銀塩プリントを昨年中国で制作しました。142×178cmの印画紙に数百プロセスにもなるプリント作業です。たくさんの存在が集積したイメージをじっくり見てください。

佐野陽一 / SANO Yoichi

日常や旅で出会った風景をピンホールカメラで撮影。記憶の原風景となるような、空間のなかの時間と光を堆積させた作品

<プロフィール>

1970年東京都生まれ。1994年東京造形大学造形学部卒業。1996年同研究生修了。2004-05年文化庁新進芸術家国内研修員。「世界を知覚する手がかりとしての写真」をテーマに作品を展開する。アユミギャラリー、ツァイト・フォト・サロン、switch point等で個展開催。「VOCA展2004」(上野の森美術館)、他グループ展多数。現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科非常勤講師。

自作を一言で表すとしたら、写真に内在するモチーフを純粋な手法でいかに豊かなイメージをつくるのが出来るのか、となるでしょうか。光の現象によって成り立つ写真をピンホールの原理を頼りに、様々な局面を印象のまま止めようとする。そこに興味を向けさせるのは、写真表現そのものであるのかも知れません。覚束無いことばかりでも、さびれた駅の案内図で見つけた目的地で、偶然に身を任せて写したイメージが抗いようもなく美しいと感じることが確かにあるのです。



《flow》(水面、木の反映) 2010-11年 ©yoichi sano



《either portrait or landscape 1A》、2007年
© Maiko Haruki Courtesy of TARO NASU

春木麻衣子 / Haruki Maiko

《either portrait or landscape 1A》 2007

極限まで露出をアンダー/オーバーにして黒い/白い写真を作り出すことで、「見ること」自体を問い直す作品。

＜プロフィール＞

1974年、茨城県生まれ。玉川大学在学中 Goldsmiths College, University of London に交換留学(95-96年)。主な個展は2004年「雨」、05年「yell」(TARO NASU Gallery、東京)、06年「●○」(NADiff、東京)、10年「Possibility in portraiture」(TARO NASU、東京)等。グループ展は2006年「VOCA展2006」(上野の森美術館、東京)、「On Recent Landscape」(PHotoEspaña06)等。07年「六本木クロッシング 2007: 未来への脈動」展(森美術館、東京)で特別賞受賞。

あたりまえだけれども、「想像」は作家の専売特許じゃない。

観者も「想像」するからこそ、写真とか作品が生きるのだと信じています。

観ることと撮ることに自由になつたる絶妙！で魅了的！！な想像を写真にしたい。

そして、それが日常をほんのすこしでもドキドキさせるシカケになれば嬉しいです。

■本展のテーマと、出品作家について

あなたが見ているものは、隣で見ている人と果たして同じでしょうか。私たちは目に見えるものを安易に信じすぎてはいないでしょうか。

今年で10回目を迎える「日本の新進作家展」では、私たちの「見る」という行為そのものを再考するきっかけを与えてくれる作品をご紹介します。いずれの作家も一見、「これが写真だろうか」と思うような作品を制作しています。しかし、だからこそ私たちは受動的ではなく自発的に写真と出会い、自らに引き寄せて考えることができるのです。

添野和幸はフォトグラムという写真構造の中でも最もシンプルな技法を用いて、ビールの泡、ウイスキーの氷といった嗜好品、時には自分の人生を支えてくれる身近な存在を視覚化します。この作家は自身、生死の縁をさまよったこともあり、そのせいもあって、刻々と変化していずれ消え去るものの存在を残すことをとりわけ大切に考えています。

西野壮平もまた、日々変化する都市を作品にしています。彼は自らの足で歩いた都市をその記憶と共にコラージュして、独自の地図を制作します。街中のさまざまな場所から撮られた写真には、その土地の歴史はもちろんのこと、その時その場を訪れた作家の経験や偶然の出来事など、さまざまな現実が数ヶ月もかけて再構築されます。

北野謙は人の存在に迫ります。ある場所で特定の人々を撮影したネガを多重露光で何重にも焼き込んだ、全体にぼんやりとした人物像を前にすると、私たちはその人たちの属性やそれらに対する「認識」と自ずと向き合うこととなります。

では、私たちの認識や記憶というものは、どのように形成されるのでしょうか。佐野陽一のピンホールカメラでぼんやりと写し出される作品は、現実が視覚化されて私たちの記憶となる最初のイメージ、記憶の構造を思い起こさせます。光そのもの、色そのものが記憶の層をつくる瞬間の、しかし、ぼんやりした視覚です。

そして、春木麻衣子は見ること自体を問題にします。じっくり目を凝らさないと細部が見えない暗がりの作品や、逆に溢れる光の中でようやく見えてくる街並みや人の影と対すると、私たちが日常あたりまえのように「見えている」と思っている、その行為自体を問われているようです。

いずれの作品も写真の根源的な手法や特性 — 光、時間、記憶、記録など — に立ち戻りながら新たな写真の可能性を探っています。そして何よりも、作品を見る私たちのありようを問いかけているのです。これらの作品を契機に、私たちが受け身になることなく写真と対し、自らの記憶や認識を日々再考してゆくことができれば、写真というメディアは新たな飛躍の時を迎えられるのではないのでしょうか。

■関連対談

5人の出品作家がそれぞれのゲストをお招きして対談を開催します。

開催日程 12月10日(土) 佐藤時啓(美術家、写真家)×佐野陽一(出品作家)
12月11日(日) 山崎博(写真家)×添野和幸(出品作家)
12月17日(土) 中島英樹(アートディレクター、グラフィックデザイナー)×春木麻衣子(出品作家)
2012年1月14日(土) 大竹昭子(文筆家)×北野謙(出品作家)
2012年1月21日(土) 藤森照信(建築家)×西野壮平(出品作家)

時間:各日とも15:00-16:30

会場:東京都写真美術館 1階アトリエ(定員50名)

対象:展覧会チケットをお持ちの方

開場:14:45より(整理番号順入場、自由席)

受付:当日10:00より当館1階受付にて整理番号つき入場券を配布します

■フロア・レクチャー

会期中の第2・4金曜日の14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケットの半券(当日有効)をお持ちの上、展示室前にお集まりください。

■展覧会カタログのご案内

本展の開催に合わせてカタログを発行いたします。

『日本の新進作家展 vol.10 写真の飛躍』

出品作品と関連テキストを掲載した展覧会カタログを発行いたします。

価格未定 ※当館ミュージアムショップにてお求めいただけます。

■開催概要:

展覧会名 日本の新進作家展 vol.10 写真の飛躍
elan photographic -- Contemporary Japanese Photography

会期 2011年12月10日(土)~2012年1月29日(日)

会場 東京都写真美術館 2階展示室
〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

主催関係 主催=公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/東京新聞
協賛=株式会社資生堂/東京都写真美術館支援会員
協力=有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー

開館時間 10:00~18:00(木・金は20:00まで) ただし、2012年1月2日・3日は11:00~18:00
※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)、および
2011年12月29日~2012年1月1日、1月4日

観覧料 一般 700(560)円/学生 600(480)円/中高生・65歳以上 500(400)
※()は20名以上団体料金と東京都写真美術館友の会会員
※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩7分/東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分
※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

■お問い合わせ先:

東京都写真美術館事業企画課

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

展覧会担当 丹羽 晴美 h.niwa@syabi.com 石田 哲朗 t.ishida@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

電話:03(3280)0034 FAX:03(3280)0033

このリリースに掲載の図版を、プレス用にデータにてご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください。